

# 子どもたちの芸術体験

— 沖縄でのこれからの可能性を考える

- [日 時]** 平成29年7月28日(金) 17:00～18:30  
**[会 場]** 那覇市IT創造館  
**[ゲ ス ト]** 渡久地 圭 (ビューローダンケ代表/フルート奏者)  
 喜舎場 梓 (TEAM SPOT JUMBLEマネージャー)  
**[参加人数]** 41名(受講生38名、関係者3名)



**[講 師]** 太田 あきら (アシテジ日本センター理事)

1996年東京演劇アンサンブル (TEE) 入団。以後、ほとんどの作品の制作にかかわる。日本児童・青少年演劇劇団協同組合 (児演協) の人材育成担当として、多くの講座・ワークショップを担当している。これまで五大陸20ヶ国を越える国々からの講座・ワークショップを開催。2004年文化庁在外研修員としてスウェーデン・ウナリクスへ短期留学。現在、日韓演劇交流センター事務局長、児演協副代表理事。

## ▶ 概要

地域の子どもたちに、芸術体験の機会をつくることで成長につながる一方で、教育現場ではどのような課題があるのか。太田氏が聞き手となり、沖縄県内で演劇、音楽の分野で活躍する喜舎場氏と渡久地氏を迎えてお話を伺った。

### ●子どもたちの自己表現を育む演劇

日本の児童演劇は、演者が学校に赴いて上演することで劇団が育ち、プロフェッショナルになってきた経緯がある。とくに、「芸能を子どもに見せたい」という先生の思いから、学校を中心に広まってきたが、学校での上演は体育館が中心で、会場も狭く、設備が足りないため、さまざまな工夫がなされてきた。1990年代からは、子どもたちが芝居のワンシーンに参加するようなワークショップが含まれる学校公演に対して、文化庁の助成が出るようになったこともあり、授業でも演劇を切り口にしたアイスブレイクを行うなどの手法が注目されるようになった。例えば、授業のはじめに、子どもたちと一緒にジャンケンゲームをしながら、輪に入れない子がいないか、男女の仲がいいのか、全体を見ながら授業の進め方や内容を決めるというのも演劇の手法を活用した例である。

### ●音楽のアウトリーチで創造性を深める

アウトリーチとは、劇場などに来れない人にも鑑賞の機会を届けること。渡久地氏は、クラシックのフルート奏者として学校で演奏を行ったり、子どもたちと共演したり、作品を聴きながらイメージを連想する体験などを提供している。アーティストと共演した



ビューローダンケ代表/フルート奏者の渡久地圭氏

り、部活の演奏指導（クリニック）をすることで、子どもたち自身が音楽に対する創造性を深めたり、モチベーションを高め、これからの夢や目標を持てる。ただ、学校によっては、予算の都合で音楽鑑賞を辞めてしまうところもあるため、継続したアウトリーチのためには資金調達も必要となる。

### ●児童演劇におけるファシリテーターの役割

喜舎場氏の劇団が行う演劇ワークショップでは、小学校や中学校の総合授業の一環として、体験型学習を提供している。子どもたちに正解がない課題を与え、創造的に、また創作しながら解決するプロセスを通して、コミュニケーション能力の向上を図るように取り組んでいる。

うらそえぐすく児童センターでは、地域の自治会長など地域で見守り活動をされている方と児童あわせ約50名に、3回のワークショップを実施。大人と子どもが顔見知りになり、道端で会うと挨拶したり、声をかけ合ったりする姿が見られるようになった。こうした演劇ワークショップでは、参加者が対等に対話できるように場を整えるファシリテーターの存在が重要になる。親と子、また教師と生徒の関係性とは違う立場の大人がファシリテーターとして入り、自発性を引き出すことに意味がある。



TEAM SPOT JUMBLE マネージャーの喜舎場梓氏

### ●子どもたちが持つ可能性に訴求する芸術体験

太田：継続的なアウトリーチ活動のためには支援が必要となる。文化庁の助成金や一般財団法人や企業、訪問先の団体などからの支援を得ることもあるが、沖縄では個人から支援してもらえることもあるのか。

渡久地：地元にある県立本部高校のクリニックで支援

してくれた病院の先生には、小学校からお世話になっている。地元の本部町という地域性もあるが、お互いに顔が見えて、近い距離にいるから支援をもらえたと思う。

太田：アウトリーチ事業の窓口になるのは学校の先生で、意義や理解を示す方がいれば、事業内容を指定する方もいると思います。学校の先生たちのアウトリーチに対する要望に変化を感じることはあるか。

渡久地：以前は、「うちの吹奏楽部には、こういう課題があるから1パート（特定の楽器）だけやりたい」という声もあった。しかし、合奏はすべてのパートで行うので、これからは、いろんな奏者を招いて、子どもたちみんなが、どうやったらいい音が出るのか一緒に考えるようなクリニックを構想している。

太田：うらそえぐすく児童センターの事例については、苦労されたこともあったのではないか。

喜舎場：大人と子どもたちとの関係性には気をつけた。一方的なコミュニケーションにならないよう、発表会のテーマを「おじいちゃんが経験した、過去のエピソード」にして、内容を考えていく中で、まず子どもが聞き、それに大人が答える関係性を導くように心がけた。しかし、周りにいる大人によって、こうしたコミュニケーションの意義を理解してもらえないこともある。

太田：ワークショップに参加した地域のおじいちゃん、おばあちゃんのモチベーションはどうだったか。

喜舎場：はじめ、協力してくれた大人たちから「これは、何の意味があるんだ？」と素直に聞かれた。ワークショップを通して知ってもらい、地域に住む方が顔や名前を覚えてもらい、そこから挨拶しあえる関係性が生まれることで、発表会でも協力しあえるようになった。

来場していたワークショップを受け入れた学校の先生からは、こうした取り組みへの感謝と、子ども達のためにも、もっと広げていってほしいという期待が寄せられた。